

クビアカスカシバ

○被害と発生生態

幼虫がブドウの主に主幹部や太枝の粗皮下を溝状に食害する。被害部には数頭の幼虫が寄生していることも多く、主幹を環状に食害されると枯死に至る。環状はく皮した樹や以前に被害を受けた樹は被害に遭いやすい。1970年代にブドウでの被害が確認されたが、2000年以降、急速に被害が拡大し、全国的に問題となっている。

成虫の体長は約3cm、ガの仲間であるが翅が透明で、スズメバチに非常に似ている。発生は年1回で、成虫は6月下旬頃から羽化し始め、8月中旬頃まで産卵する。若齢幼虫は乳白色であるが、老齢幼虫は桃紫色となり体長は4cmに達する。7～9月に虫糞やヤニを目安に粗皮をはがすと中に食害痕と幼虫を見つけることができる。終齢幼虫は10月頃被害樹から土中に移動し、地表から数cmのところまで土繭を作り越冬する。



成虫（鳥取大学 中秀司氏撮影）

○防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・粗皮削りを行い、被害発見に努める。
- ・虫糞を目安に7月～9月に捕殺を行う。

(イ) 薬剤防除

- ・6月～7月にパダンSG水溶剤、フェニックスフロアブルを樹幹および主枝に十分散布する。



主幹の被害（いずれも粗皮をはがしたところ）



虫糞（これを目安に捕殺）



老齢幼虫